



自分が生かされる花の道



日本には、柔道、剣道、弓道など、武道と呼ばれる運動文化や、茶道、華道、書道などの伝統芸道があり、いずれも鍛錬や修行のプロセスを重んじる「道」が付いています。

また、道とは、人生に例えられる言葉でもあり、かの有名な作家、武者小路実篤は、自分が選択した生き方を信じ、後悔せずにその道を進むことの大切さを説き、「この道より、われを生かす道なし。この道を歩く。」と名言を残しました。技を鍛えていくことを「道を究める」とするならば、人生は「生き方を充実させる」ことではないでしょうか。

令和7年6月、池袋サンシャインシティにおいて、花いけバトル2025が開催されました。都内及びその近郊から、15校30組が出場し、本校からも華道部の代表2チームが全国大会目指して挑戦しました。私は会場に到着すると、ふとポスターに目が留まりました。「花いけ」と書かれた文字を見て、「活ける」「生ける」それとも……。頭の中がざわつきましたが、いつもなら直ぐにスマホで調べる私も、その日は敢えて思考を巡らし、生徒を応援することにしました。

午後1時、いよいよバトルが始まりました。各校の生徒は、主役や脇役となる花、草木、流木を瞬時に見極め迷うことなく手に取っていきます。各チームとも、見栄えのする大きな枝で攻めたり、色鮮やかな花でインパクトを与えたりするなど、趣向を凝らしたアレンジで戦いに挑みます。

本校生徒が大きな松の枝を選択した時のことでした。司会が「大きい枝は、安定させることがとても困難です。」とアナウンスすると、観客も固唾を飲んで見守ります。そして、生徒の思いが通じたかのように、松が花瓶の中でピタッと止まった瞬間、割れんばかりの拍手が起きました。

花と向き合う生徒の姿勢は、日々の稽古で鍛えた感性に溢れており、とても誇らしく見えます。制限時間となり、精一杯の愛情を込めた花が舞台上で凛とした美しさを保つと、生徒の笑顔と重なる様に生き生きとしていました。その時、私の疑問が解けました。花をいけるとは、飾るのではなく、活かすのでもなく、命を与えることだと気づき、「生ける」であることを確信したのです。



本校華道部は、日頃から花と対話し、息遣いまでも感じながら花と向き合っています。特に、花の持ち方、置き方、切り方などの礼儀作法を重んじており、花との出会いは、二度と無い貴重な機会であることを教わっています。このように、花の心を知る道を一步ずつ歩むことで、花を生かすのではなく、自分が花で生かされていることに気が付くことでしょう。

生け終えた花を前にインタビューを受ける生徒の笑顔は、学びの匂いとなって、道を極めようと努力した充実の日々を物語っているようでした。

令和7年6月